大江健三郎「核時代の森の隠遁者」論
－「贖罪羊」と「自由」を通してみる沖縄の姿を中心に－

松崎美恵子*
mimidae@naver.com

<目次>

1. はじめに
2. 「贖罪羊」としての沖縄
3. アイデンティティーを回復する「自由」
4. 圧殺される人々の声
5. おわりに

主題語: 核時代(Atomic Age)、贖罪羊(Expiation sheep)、自由(Freedom)、森(Forest)、隠遁者(Eremite)、沖縄(Okinawa)

1. はじめに

大江健三郎の「核時代の森の隠遁者」は1968年の『中央公論』8月号に発表され、その後、単行本『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』(新潮社1969.04)に所収された短編小説である。大江が初めて広島の被爆者を取り扱った1964年発表の「アトミック・エイジの守護神」(初出:『群像』1964年1月号)以来、「核」という言葉がタイトルに含まれた二つ目の作品となる。

森の谷間に住み、妻に姦通された経験をもつ寺の住職の「ぼく」が主人公兼、語り手であり、物語はかつて谷間の住人であった「きみ」という人物に対して「ぼく」が自身の生活や森の谷間の村での出来事を語りかけていく形で進行していく。テクストでは住職の「ぼく」をはじめ、大食病の女ジンや森の隠遁者ギーなど『万延元年のフットボール』(初出:『群像』1967年1-7月号)に登場した特異な登場人物たちが再び描かれている。名前は明らかにされないが「自由」をもとめてアフリカへ渡ったとされる「きみ」も、その設定から根所蜜三郎のその後の姿として捉えられる。このように「核時代の森の隠遁者」は『万延元年のフットボール』の外伝、あるいは後日譚のような形式で描かれた作品となっている。このような作品構造

* 済州大学 日語日文学科 講師

から「ぼく」と妻の物語が補助的に出てきたと考える渡辺広士は、隠遁者ギーを「中心テーマのにない手」とみなし「生命の象徴であると同時に死の象徴でもあるよう」な「森の力」に着目している。[1]また、渡辺と同様に「森」に焦点を当てた黒古一夫は、隠遁者ギーの発するメッセージを高度経済成長の中で豊かさを追い求めた1960年代末の日本人に対する作者の警告とし、大江の「<森>の思想」が深めらた作品だと評している。[2]

作品論としては、2004年8月『原爆文学研究』に発表された楠田剛士の「大江健三郎「核時代の森の隠遁者」論」があげられる。本論にて楠田は1960年代当時の世界の核兵器保有状況やアメリカの核実験の現状に触れつつ核問題と関連づけて論じている。ギーを中心に考察を行なった楠田は、ギーを通し「ヒロシマ・ナガサキ以降の核の時代の「毒」を敏感に察知して、それらを自ら生きる「力」とするあり方」が提示されていると結論づけている。[3]つまり、ギーを核の危険性を把握し核問題と向かい合おうとする人物として捉えているのである。

以上のように先行研究では、隠遁者ギーや大江作品において核心となる小説空間の「森」に着目し、自然と科学発展の究極の形としての核を対照させることで作品分析を行ない、核に対する作者の危機感と連続して考察している。ギーの放つ言葉や彼の死に依拠すると、「核時代の森の隠遁者」というタイトルが示すように、ギーを通し核の恐ろしさと核問題について言及されていることは自明である。しかしながら、核に対する言及はテクスト

---

1) 渡辺広士(1975)「解説―両義的な小説」『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』新潮文庫、p.465参考。本論にて渡辺は「核時代の森の隠遁者」を『万延元年のフットボール』の後日譚の形をとる作品とし以下のように分析している。「「核避難所(シェルター)のモーゼ」という詩に結びついた隠遁者ギーが中心テーマのにない手で、住職と大女の妻の物語は補助的に出てきたものと考えられる。過去しか見なかった徴兵忌避者ギーがここでは未来への預言者と変わった。そして自らを予言という狂気の生(い)け贄(にえ)としてしまう。(中略)しかしこの短編で、荒廃する世界の中での<驚くべき生命>の荒れ狂う隔離された場は、生命の象徴であると同時に死の象徴でもあるようだ。ラテン語で死をmoriということがこの本のある個所で触れられている。またガンの生命力に見るような暗黒としての<森の力>のことは『万延元年のフットボール』に何度か言及されていた」

2) 黒古一夫(1989)『大江健三郎論―森の思想と生き方の原理―』彩流社、pp.36-38参考。本論にて黒古は「核時代の森の隠遁者」を「さらに大江の<森>の思想は深められている」作品とし、ギーの「詩のごときもの」というメッセージが「ますます高度経済成長の波にのって豊かさを追い求める1960年代末のこの国の人々に対する、大江の警告でもあったと言えるかもしれない」と論じている。

3) 楠田剛士(2004)「大江健三郎「核時代の森の隠遁者」論」『原爆文学研究』原爆文学研究会編、pp.78-82参考。楠田は本論にて、ギーの「詩のごときもの」と彼の事故死が谷間の人間に「毒」として広島の原爆の記憶を呼び起こし危機感・不安感として侵食し、人々は新しい場所を求めることで解毒しようとしたと指摘している。1960年代当時の世界の核兵器やアメリカの核実験の現状に触れつつ、核時代を生き延びることのできる場所を「森」ではなく「自己に答えを求めなければならない」とギーが伝えたかったのかもしれないと分析している。

後半にのみ集中的に描かれており、物語の流れの中枢となっているのは「ぼく」と谷間の住人たちの生活である。作品全体を読み解くためにはこの「ぼく」と「ぼく」の周辺人物たちにこそ目を向け、それらがどのように描かれているかを考察する必要があると考える。また、作中で「ぼく」によって何度も繰り返されている「贖罪羊」と「自由」いう言葉にも注目すべきであり、これらの言葉がテクストにおいてどのような意味をもつのか読み解くことも必要であろう。本稿では「ぼく」とその周辺人物の関わり方、そして「ぼく」から発せられる「贖罪羊」と「自由」という言葉に注目しテクストを考察することで、核問題にとどまらない作家である大江の着目点について解釈を試みる。

2.「贖罪羊」としての沖縄

「核時代の森の隠遁者」の舞台は森の奥の谷間の村であり、そこに住む住職の「ぼく」が主人公兼、語り手である。ある日「自由」を探し求めて谷間を抜け出し、アフリカへと渡った「きみ」を偶然テレビで見掛けた「ぼく」は、自分も同じように「自由」を探して生きていることを彼に語りかけ始める。この後も「ぼく」が過去のおよそ一年間に谷間で起った出来事を回顧しながらそれを「きみ」に語りかける形で、物語は進められていく。

「ぼく」は小学校の体操教師であった妻と結婚するが、夫婦間の性行為について「ぼく」から反抗された妻はかつての年下の同僚を誘惑し地方都市へと駆け落ちする。情人と村を出て行った妻は、その数年後、男との間にできた二人の娘を連れて「ぼく」のもとへ戻って来る。「ぼく」が妻たちを受け入れ共に暮すようになったのをきっかけに、「ぼく」たちは村の人々から寺を追い出され、かつての養鶏場跡の小屋に住むこととなる。それでも「ぼく」は、森から出ていかない理由を「「自由」をもとめてのことなのだ」[4]と語る。抑圧的な態度を取り続けてきた妻に対しても寛容な態度を見せる「ぼく」は、妻の過去の姦通について、以下のように振り返る。

> しかし公平にいってぼくはあのころ、妻の「自由」に干渉することを望まず、自分の「自由」を妨げられることを希望しなかったというにすぎない。そもそも、妻の姦通は(滑稽なことに妻はそれを、わたしたちの姦通というよ、ぼくと妻とが、そのわたしたちの内容なのさ)こんな具合い

4) 大江健三郎(1966)「核時代の森の隠遁者」『大江健三郎全作品 第Ⅱ期 3』新潮社、p.159

にはじまったのだから、確かに妻のいいぶんは五十パーセント正しく、そしてぼくの意見もまた五十パーセント正しいと思える。5)

自身の「固定観念」から夫婦の性関係について一方的な要求をし、それに抵抗されたために妻は情人と谷間を出ていった。情人との間にできた娘たちを連れて戻ってきた妻の態度は理不尽とも言えるが、「ぼく」は上記のような考えを理由に妻を受け入れるのである。「自由」という理念のもと「わたしたちの姦通」という妻の主張も受け入れてしまう「ぼく」の寛容な態度は妻に対してだけでなく、谷間の人々に対しても共通している。このことは以下の通り読み取れる。

ぼくは善良そのもので、いつも微笑しており、したがって幾分かは、つねに憂わしげな、自己犠牲型の弱い人間に見えていたということだろう。実際、ぼくはいつも谷間とそこに住む人間の、今日と明日について考えていた。谷間の人間がそれを必要だとみなすかぎり、ぼくはどのようなことでもひきうけた。ぼくは、いわばすっかりおのれをむなしくして、谷間の人間のためにのみ存在していた。日日の生活の細部のすみずみまで、ぼくは村の人間たち各自の恣意(しい)によって蹂躙(じゅうりん)されていたといってもいいくらいだ。しかもぼくは微笑してそれを忍耐し、そのすべてを黙って受けいれ、そしてひたすら谷間のこすっからい連中や愚かしい者どもの現在と未来のために思案しつづけていたわけだ。6)

(傍線筆者)

(前略)ぼくはそのように谷間のあらゆる人間の恣意に縛られている状態にありながら、いや、そのように完全に個人的な意志を放棄することによって、やはり「自由」を求めていたのだし、なかばはそれに成功していたのだ。ぼくは自分の個人生活の垣根をすっかりとりさってしまい、そして自分自身のための未来ということは考えず、そもそもぼく自身の欲望などは他人事のようにはじめから軽くあしらっていた。したがってぼくは谷間の住民どもに蹂躙され、なにもかも持ってゆかれ、あらゆる時間を連中のためにこきつかわされても、結局、自分がおかされているという抵抗感をもつことはなかった。7)

(傍線筆者)

5) 大江(1966)前掲書、p.161
6) 大江(1966)前掲書、p.160
7) 大江(1966)前掲書、p.160

上記引用文に共通して見られるのは「蹂躙され」ているという「ぼく」の認識である。そして「蹂躙され」ていることを自覚しながらも「自分がおかされているという抵抗感」を持たず、すべてを受け入れている「ぼく」の態度は自己犠牲的だといえる。このような自己犠牲的な「ぼく」の態度が住職という職業に依拠していると解釈するのは自明的であろう。しかし、「ぼく」と谷間の人々との関わり方の特異性に着目すると、そこには住職と村人という関係を越えた力関係が見えてくるのである。

姦通した妻とその娘たち、それを受入れた「ぼく」は教育上の理由から寺から追い出され、その後「正面からお互いの眼をみつめあったことがなかった」[8]とされるほど、谷間の人々から疎外される。しかし、寺を出てからおよそ6か月が過ぎたある冬の夜から、谷間や「在」の人々は「ぼく」の小屋の周りに米や野菜や餅、インスタントラーメンなどの食料を置いていくようになり、それらが自分への御供物であることを「ぼく」は察知する。のちに新しく谷間にやって来た住職から大食病の女ジンが死んだことを伝えられた「ぼく」は、「贖罪羊の役割」が自分にまわってきたことを確認するのである。

> 大女ジンが死んだ以上、ますます下降してきている谷間の人間の経済生活への認識を軸に、ともかく谷間のすべてがうまくゆかなくなっていることへの村民の不安の総量をひとり担ってくれる贖罪（しょくざい）羊の役割が、こんどはぼくに廻ってきた模様だ、ということを思いめぐらしていたんだよ。(中略)谷間と「在」の人間すべてにおそいかかっている心理的なペストの病原菌を一身にひきうけてまことに惨めに生きのびるべき贖罪羊は、誰の眼にもあきらかに谷間じゅうでもっとも憐れきわまる脱落者がその候補でなければならい。[9]

『万延元年のフットボール』に登場した大食病の女ジンが「現世での汚辱の象徴だった皮下脂肪のすべてをすっかり燃やしつくして死」[10]に、そのかわりに「ぼく」が「贖罪羊」に選ばれたのである。『万延元年のフットボール』のジンと同じく「ぼく」も、谷間や「在」という森の人々によって「贖罪羊」へと担ぎ上げられる。森の人々を一つの共同体と考えれば、ジンも「ぼく」も共同体のために犠牲とされる存在として捉えられるだろう。しかし、テクストにおいて「ぼく」が具体的な何かの身代わりや犠牲になることはなく、ジンの死因も明かされることはない。テクストでは現実社会と連続するような具体的な時代背景などは描かれ

8) 大江(1966)前掲書、p.168
9) 大江(1966)前掲書、p.171
10) 大江(1966)前掲書、p.175

ていないため、「贖罪羊」の表象を読み解くための手掛かりとして依拠できるのは、作品の発表された1968年という時期である。

1968年の日本社会は1964年の東京オリンピック以降、再び好景気を向かえていた頃であるが、政治外交的には沖縄返還に関する動きが盛んになっていた時期でもある。1965年の春にはじめて沖縄を訪問した大江も、その後沖縄に関する言説を残している。1968年11月10日、米軍の支配下にあった沖縄で琉球政府行政主席の公選が行なわれることとなり、大江もその前月の10月に「明るい沖縄をつくる会」[11)]のさまざまな集会に参加したことが1969年のエッセイにて明らかにされている。そこで、むしろを敷いて地面に座っている沖縄の人々を目にした大江は、以下のように語っている。

> 地面に腰をおろしている人々は、いわゆる繁栄に繁栄をかさねる基地経済の外にいる農民たちである。かれを追いつめているのが琉球処分から太平洋戦争にいたるまで、中央権力をおしつけてきた本土政府であり、戦後二十三年間、太平洋のむこう側の中央権力をおしつけてきた米政府であることを、あの場で見あやまりようは誰にもなかったであろう。農民たちはかずかずの抵抗をつみかさねてき、その抵抗のつみかさねなしでは主席公選もなかったわけであるが、じつはあの農民たちは、核兵器をふくめてそれこそありとある兵器をふんだんにそなえた米軍兵士のまえに、憲法にすらまもられることなく徒手空拳で立つほか抵抗の方法をもたぬ人々なのである。かれらに面とむかって誰が、沖縄の状況の剥きだしの本質を見ないでいられただろう。そこには今日の沖縄の状況それ自体があって、それよりほかのなにものもなかった。[12)]

選挙結果は日米両政府の支援を受けた西銘順治候補を破り、沖縄の即時無条件全面返還を掲げていた屋良朝苗候補が当選した。しかしながら、1972年の沖縄返還は米軍基地付きという形に終わったことは言うまでもないだろう。明治の琉球処分以来の弾圧と太平洋戦争末期の地上戦、戦後も残された米軍基地負担など、沖縄の人々は日本政府によって多くの犠牲を強いられてきた。大江が戦後も沖縄を統治してきた米国だけでなく、それ以上の批判を日本政府に向けていることは見て取れるだろう。1951年9月8日に調印され1592年4月28日から発効となったサンフランシスコ講和条約により日本が国家としての主権を取り戻す一方で、沖縄は日本から分離され米国の施政権下に置かれることとなる。その後の沖縄では、米軍による基地建設の本格化にともなう土地の接収や、頻発する米軍人による犯罪

---

11) 明るい沖縄をつくる会:屋良朝苗候補の選挙母体であった革新共闘会議の通称で沖縄の即時無条件全面返還を掲げていた。

12) 大江健三郎(1992)「核基地の直接民主主義」『鯨の死滅する日』講談社文芸文庫、pp.121-122(初出:『世界』1969.1)

などへの批判とともに日本復帰への声が高まっていき[13]上記の公選実施へと至る。「贖罪羊」の役割を押しつける森の村人たちとは「中央権力」と米国の「中央権力」を押しつける日本政府や本土の日本の象徴であり、「贖罪羊」の役割を押しつけられる「ぼく」は米国と日本によって多くの犠牲を強いられてきた沖縄の人々の姿として捉えられるのである。

沖縄出身で積極的に沖縄について発言を行なってきた元裁判官の仲宗根勇は、サンフランシスコ講和条約により沖縄が日本から分断されたことについて以下のようにたとえている。

> 「国家」が生き残るためには人民を「里子」に差し出し領土と主権をどこかの親「国家」に里子とともに放棄することなどは序の口で、必要とあらば「里子」に出したその子を絞殺することもあえて辞さないのが、巨大なリヴァイアサンとしての「国家」の冷徹な本質なのだ。[14]

仲宗根のこの発言は、当時の日本と沖縄の関係を象徴的にあらわすと同時に、沖縄の人々の心情を代弁しているといえるだろう。サンフランシスコ講和条約によって事実上日本国家に「放棄」された沖縄は、さらに安全保障条約により米軍基地負担の多くを押しつけられたともいえる。大江は上記のような本土の日本のために沖縄を「放棄」した日本政府と、それにより犠牲となった沖縄の姿を、森の谷間の共同体と、疎外され「蹂躙され」る「ぼく」の関係を通して描き出したのである。

以上のように「ぼく」と谷間の村人の関係を捉えると、もともと谷間の人間である妻も、米国に肩入れする日本政府、あるいは米国の表象として捉えられるであろう。小学校の体操教師だった妻は「ぼく」よりも20センチも背が高く、15キロも体重が重く、谷間の男に「赤軍女兵士」と呼ばれるほどの大女だとされる。また、娘たちから「ママ!」と呼ばれる妻からは、一般的な日本人よりも欧米人を連想させられる。

> 妻は、自分でその事実誤認をよくわきまえていながら、この種のおよそ真実とは逆のことをいいたててては、ちょうど岩の裂け目のようにも狭く硬い自分の領土を、絶望的かつ狂的な蛮勇を

---

13) 新崎盛暉(2016)『日本にとって沖縄とは何か』岩波新書、pp.18-20 参考。新崎は本論にて、1952年のサンフランシスコ体制の成立するまでの対日講和会議の実施が具体化される時期、アメリカが沖縄の日本からの分断を固定化し、沖縄を自国を施政権者とする信託統治制度の下に置く方針を示していたと述べている。この時期から沖縄での米軍犯罪が頻発し沖縄の人々の日常生活を脅かすほどであったこと、1952年4月28日以降の基地建設本格化にともなう米軍による土地の取り上げ、復帰運動の中心であった教職員の弾圧などにより沖縄を含めた群島での日本復帰の機運が広がったとしている。ただし、過酷な地上戦を体験した沖縄の民衆があえて日本復帰を選択した背景には「平和憲法を制定して生まれ変わった戦後日本への期待感があった」とも述べている。

14) 仲宗根勇(2014)『沖縄差別と闘う悠久の自立を求めて』未來社、p.12

ふるってこじひろげようとするわけだ。15)

自分の非を感じながらも「わたしたちの姦通」と呼び「自分の領土」をひろげようとする妻の理不尽な態度は、本土という国家のために米軍基地負担を強いることを決めた日本政府の沖縄に対する態度のようでもあり、極東アジアの平和維持という名目のもとに自らの正当性を主張し沖縄の基地を手放さなかった米国のようにも捉えられるのである。

テクストの発表された1968年は明治元年からちょうど百年の年であり、日本政府による明治百年記念式典が行なわれるなど、日本が近代国家へと歩み始めた明治を礼讃する社会的気運が醸成された。明治の負の歴史から目を背け、明治百年を手放しに讃える当時の日本社会とそれを扇動した日本政府を作者が批判的に捉えていたことは自明であろう。大江は1968年における沖縄の姿を通し、明治から1968年当時まで続いた沖縄への日本国家の弾圧や犠牲の押しつけを見つめ、国家権力のもとに犠牲となった沖縄の姿を「贖罪羊」として描き出したのであろう。

3. アイデンティティーを回復する『自由』

一つの共同体としての森の人々と「贖罪羊」を引き受ける「ぼく」の関係性を通し、明治から1960年代後半までの本土の日本と沖縄の姿が描かれていることを前章では指摘した。テクストでは「贖罪羊」と同様に「自由」という言葉も多く登場する。「ぼく」はテクストの冒頭から最後まで「きみ」に対して「自由」という言葉を語りかけているが、この繰り返し口にされる「自由」とは何を意味するのであろうか。先行研究においてテクストを核問題という視点から分析した楠田は「自由」を核時代の狂気からの自由として捉えている。16)しかし、「自分の「自由」な生き様」「きみ自身の「自由」」17)と表現されているように、「ぼく」の語る「自由」

15) 大江(1966)前掲書、p.167

16) 楠田剛士(2004)前掲書、pp.81-82 参考。楠田は本論にて当時の世界における核兵器の現状について提示した上で、以下のようにテクストを結論づけている。「いまも人類を何度も滅ぼすことのできる核兵器が存在する。しかも一般に眼が届く場所にはない。(中略)私たちは核時代の危機の真っ只中にあって、同時に判断不能の外部に立っている。「森の御霊」に扮して「森の力に自己同一化」を目指した隠遁者ギ―が「詩のごときもの」で本当に言いたかったことは、核時代の狂気からの「自由」はどこにも「実在するものではな」く、彼にとって森がそうであったように、他でもない自己に答えを求めなければならないということだったのかもしれない」

とはそれぞれ個人によって異なるものとして定義されているといえるだろう。また、「ぼく」が「確固とした「自由」」[18]を感じるのは、森の人々の覗き見が御供物に変わるのを察したとき、つまり自分が「贖罪羊」になることを予感したときである。

> (前略)かれら村の恥知らずどもが、それまでぼくとその家族とをあまりにもひどくあつかってきたことを不意に後悔して、慈悲心からもろもろの寄付品を運んできたのだろうか?まずそういうことはありえない。きみだってわれわれの村の人間がそういうタイプだとは思わないだろう?ありうる可能性はただひとつかれらのいわば実存をおびやかすなにごとかがおこり、そしてかれらは不安にかられて、利己的にぼくを必要としはじめたのだ。それはいったいどういう脅威なんだろうか?[19]

森の人々の性質を把握し自分を利用しようとしていることも自覚していた「ぼく」は、驚きもせず御供物を受け取り「贖罪羊」になることを受け入れる。上記引用文や「追放された後ぼくは賤民(せんみん)として行動する自由をえている」[20]という言葉からも、利己的な森の人々の性質を知りながらそこから疎外されることで「ぼく」が「自由」を認識していることが確認できるであろう。「ぼく」の語る森の人々の全体像は、利己的かつ排他的であり、娘たちが病気になっても診療さえ期待できないと思わせるほど「ぼく」に孤立感と不安を与えた。このような森の村人と「ぼく」の関係についても、本土日本と沖縄の関係に照らし合わせ解釈することは可能であると考える。

米軍による弾圧などに対する沖縄住民の不満の声が高まっていた1957年以降、米国は弾圧から経済成長促進へと沖縄統治政策を転換していく。米国の政策転換の中で、日本政府の期待を背負った沖縄保守勢力は本土との一体化政策を打ち出していき、1960年代に入ると日本政府からの沖縄に対する経済援助も行なわれるようになる。[21]この一体化政策に対

---

17) 大江(1966)前掲書、p.186
18) 大江(1966)前掲書、p.169
19) 大江(1966)前掲書、p.170
20) 大江(1966)前掲書、p.175
21) 櫻澤誠(2015)『沖縄現代史 米国統治 本土復帰から「オール沖縄」まで』中公新書、pp.79-109 参考。本論にて櫻澤は1957年6月5日発令の「琉球列島の管理に関する行政命令」により弾圧から経済成長促進へと沖縄統治政策の転換が図られていくと指摘している。その理由をそれまでの復帰運動に対する弾圧や米軍兵による事故や事件への抵抗運動として「島ぐるみ」運動が起るなど住民の不満を押さえることが難しいと米国政府が判断したためだとする。また沖縄への本土関与を拡大しようとする日本政府も沖縄への経済援助を開始し、沖縄保守勢力も本土との一体化政策を推進していくが、その過程での1964年の東京オリンピックが日本の経済成長を沖縄住民に意識させ日本復帰への渇望をもた

し、以下のように大江は批判的な態度を見せている。

> 本土の政府･自民党が、沖縄でもちいた欺瞞の言葉の典型が「一躰化」であったことは、すでに誰知らぬ者もいない。(中略)本土の日本人とその政府が経済的に歪み、国際政治に関わって屈伏している、その変則の状況は、われわれがみずから憲法を実質的に放棄しかねないところまできていることに由来するであろう。ところが軍事基地のなかにかこみこまれた状況にありながらも、その政治的な想像力の根幹に平和憲法をすえることによって、その経済の歪みを直視し、その志においては決して核基地に屈伏していない沖縄の日本人にたいして、おまえたちはその態度を棄てよ、われわれ本土の日本人ともども歪みと屈伏とをすすんで受けいれよ、という卑しい脅迫がおこなわれたのが、すなわち一体化の構想であろう。抵抗しつつもそれを押しつけられざるをえない核基地に生きる日本人に、それをわれと望んで許容せよ、と強請したのが、すなわち一体化の構想であろう。そうした、まことにモラリティの感覚などはみじんもはいりこむことのできぬ企画を、一体化というあいまいな言葉でむりやりおしくるんだ、その欺瞞は、じつは本土においてはつねひごろ通用してきたやりかたなのである。
> しかし沖縄的なるものが、この欺瞞をはねつけた。[22]

大江は一体化政策に批判的な姿勢をあらわにし、自分と同じく一体化政策に反対の立場をとる沖縄の人々に同調する態度を見せている。前章で述べた通り、1968年11月10日に初めて行なわれた琉球政府行政主席の公選では、沖縄の地位や身分が保障されることを前提とした即時無条件全面返還を掲げていた屋良候補が選ばれた。ただし、屋良候補が掲げた沖縄の全面返還とは積極的かつ自主的な日本への返還を意味するものではなく、新崎盛暉が述べているように米軍の統治から抜け出す方法が当面日本復帰以外にはなかったためなのである。[23]このような事実に基づき、日本政府に対し本土との同一化を意味する一体化政策への抵抗の意志を見せた沖縄の人々の態度を「沖縄的なるものの、まことに直截な自己表現」[24]であると大江は評価するのである。このような作者の視点を加味すると、「ぼく」が

らしたと述べている。

22) 大江健三郎(1992)「核基地の直接民主主義」『鯨の死滅する日』講談社文芸文庫、pp.131-132(初出:『世界』1969.1)

23) 新崎盛暉(2016)前掲書、pp.46-48参考。本論にて新崎は1952年4月発効のサンフランシスコ講和条約以降、沖縄において復帰運動に期待感を抱く者と批判的に捉えようとする者があったことを指摘しつつ「米軍政下から抜け出す道は、当面、日本復帰以外にはなかった。人権の回復、自由と民主主義の確立、)経済的格差の是正、社会保障の充実など、いずれの点から見ても、すべての制度を「本土なみ」にすることが、少なくとも相対的には、現状の是正につながっていた」と当時の沖縄の人々の復帰に対する考え方と状況を述べている。

24) 大江(1992)前掲書、p.134

「贖罪羊」になり村人から孤立することで得た「自由」とは、本土復帰を受けいれながらも明治以来さまざまな犠牲を強いてきた日本との同化を拒む「自由」、つまり、日本復帰と並存する沖縄の人々のアイデンティティー回復の「自由」だといえるのである。

支配する立場にあった当時の本土の日本人の沖縄に対する差別意識の存在は自明であり、それが太平洋戦争末期の地上戦や戦後の米国統治という歴史的な沖縄の苦難に影響を与えたことは否定できない。また、戦後においても1972年の返還まで本土と沖縄の間には物理的にも心理的にも隔たりがあり、「沖縄出身ということにいやらしい好奇のまなざし」[25]と表現されているように、戦後もただちに沖縄の人々に対する日本人の視線や認識が大きく変化したとは言いがたい。このような日本人の好奇な視線が、森の谷間の人々の覗き見としてテクストに象徴的に描かれていると捉えられるであろう。子供の教育に悪いという理由で隙間だらけの仮小屋に「ぼく」たちを追いやった森の人々は、その好奇心から夜毎「ぼく」の家族を覗き見にやってきた。異様ともいえる陰湿な森の人々の「ぼく」たちへの視線は、当時の日本人の沖縄に対する視線として解釈できるであろう。

理不尽にも「贖罪羊」の役割を引き受け、森の人々から孤立することで認識される「ぼく」の「自由」とは、日本国家の犠牲となり続けてきた歴史をもちながらも、本土復帰への流れの中で自身のアイデンティティーを回復しようとした沖縄の人々の「自由」なのである。

森の隠遁者ギーの死後、多くの人々が谷間から出ていくが「ぼく」は「この掘立小屋に残りつづけて、百代も前から束縛されつづけの谷間の連中に「自由」とはなにかということを教えてや」[26]ろうと、「シャーマン」の役割を獲得する決意を明らかにする。ごく日本的な宗教である仏教に従事する住職であった「ぼく」が、変わりゆく森の様相を見つめながら沖縄のユタを連想させる「シャーマン」という言葉を口にする。このような「ぼく」の態度にも作者の沖縄に対する意識が反映されているといえるだろう。自分を「蹂躙」する人々が森から立ち去ったのち「シャーマン」になる「ぼく」は、いつの日か自分たちを抑圧するものから解放されアイデンティティーを回復した沖縄の人々の姿として捉えられるのである。

---

25) 仲宗根勇(2014)前掲書、pp.43-46 参考。1960年代前半に東京大学に在籍していた仲宗根は、本土の友人たちから「沖縄人」にしては日本語が上手だとか、沖縄に移住したのかと質問されたことを例にあげ「本土の大学に入った頃に本土日本人の友人たちが、沖縄出身ということにいやらしい好奇のまなざしを向ける彼らの沖縄観」と当時の沖縄に対する本土の人々の視線を語っている。

26) 大江(1966)前掲書、p.185

4. 圧殺される人々の声

ここまで「贖罪羊」と「ぼく」の語る「自由」の表象について、沖縄と日本の関係と照らし合わせ考察を行なってきた。本章では、テクストを分析するうえで不可欠な存在である森の隠遁者ギーについて読み解いていく。

先行研究の多くはギーとギーの叫ぶ「詩のごときもの」に焦点が当てられ、核問題と連続させる形で論じられてきた。篠原茂はジンとギーの死を同時に見据え、二人の死の中に「目に見えぬ脅威の接近を時代の狂気として感じ」られる[27]としているが、「目に見えぬ脅威」が核を推測させるものの、それが何を示しているかは具体的に論じていない。先行研究で多く指摘されたように、ギーの「詩のごときもの」や焼けて亡くなる最期の姿に目を向けると、ギーが人々に対し核問題について想起させる人物であることは相違ないだろう。では、ギーは核の狂気のためだけに死んだのであろうか。

あらためてギーの人物像と森の人々との関係を振り返ると、ギーは教養のある人物でありながらも徴兵忌避のために発狂したように見せかけ森での隠遁生活を始める。その後は人々の前にときどき姿を現すが、ほとんど彼らに相手にされることはなかった。ギーは自ら森での生活を選択したが、結果として「ぼく」と同様に森の谷間の人々から疎外され、彼らと同等の扱いを受けることはなかった。このような疎外され邪険に扱われるギーの人物像に依拠すると、彼もまた沖縄の人々の表象として捉えることが可能になると考える。また、数十年間、夜にしか谷間に降りてこなかったギーが御霊祭についての談合に加わろうと日中に降りてきたり、「ぼく」が自分の話を聞いてくれたことに歓喜し「野に叫ぶ人」[28]さながら谷間を叫んでまわった姿からは、ギーが疎外されながらも森の谷間の人々に切実に何かを告げようとしていたことがわかる。このようにギーを疎外されながらも何かの伝達を試みる人物として捉えた場合、そこに浮かび上がるのは沖縄の人々の声ではないだろうか。永い間森の人々から冷遇されてきたギーが、一時的に注目されたことが以下のように紹介されている。

---

27) 篠原茂(1974)『大江健三郎論』東邦出版社、p.268参考。本論にて篠原はジンとギーの死について次のように論じている。「大食女ジンと隠遁者ギーの死の中に、目に見えぬ脅威の接近を時代の狂気として感じとることは必ずしも困難ではないが、その狂気の中に生きる苦痛を克服する道が「森」への回帰にあることの意味を明快な論理として単純化することは困難である」

28) 大江(1966)前掲書、p.176

隠遁者ギーがちょっとしたヒーローになっていた時期があるんだよ。なにしろかれの主張するところでは隠遁者ギーがただひとり、きみの弟が谷間の娘の頭を石で叩き潰した現場に居あわせ、しかも永年の森の奥での生活によって鍛錬された、いかなる暗闇をも見とおす眼によってすべてを見たところの目撃者なんだからね。(中略)かれの見とどけたという酷たらしい殺戮(さつりく)の光景を語りつづけた。(中略)騒動のあとのセンセーションがすっかりおさまると、もともと谷間のまともな連中は、騒動のすべてを恥じており、ひたすらそれを忘れたいと思っていたわけなんだから、まず隠遁者ギーは有力者から嫌われたし、しだいに誰にも相手にされなくなってきたんだ。29)

上の事件は『万延元年のフットボール』で起った鷹四の事件を引き継いだ内容であり、その真相は不明であるが、ギーは事件現場を目撃した唯一の人物だとされている。ギーの話そうとすることに一切耳を貸そうとしなかった人々が事件のセンセーショナルさに対しては興味を示す。ギーと森の人々をそれぞれ、沖縄の人と本土の日本人と考えた場合、一度はその刺激的な事件に惹きつけられながらも、それが自分たちの恥であるため起った事実を忘れようとする人々の反応は、沖縄に対する世俗的な視線を持ちながらも、自分にとって不都合な事実からは目を背けてきた日本人の態度として読み取れるのである。沖縄の人々へ好奇な眼差しを向けながらも、過去の沖縄戦の惨状や戦後も米軍に統治され続けてきた沖縄の当時の現状からは目をそらし、沖縄の人々の声に耳を傾けようとしなかった日本人の態度が森の人々の姿から読み取れるのである。事件の真相を伝えようとするギーが沖縄の事実を伝えようと声をあげる人物であるならば、それを嫌う有力者とは沖縄の人々の声を聞き入れず圧殺してきた日本政府の表象として捉えられるであろう。

大江は1968年1月の『世界』にて、沖縄に置かれた米軍核基地について以下のように言及している。

人類がいまや自分自身で死滅しつくすかもしれぬ可能性を、核兵器の出現によってそなえた以上、死滅するか、あるいは自分自身を救助するかは、人類の日々の選択の問題だ、というサルトルの「大戦の終末」にあたっての言葉は、戦後二十二年、まともに受けとめられてきただろうか?この言葉の、具体的にさし示す危機は、ますます増大して世界の現実を覆っているにもかかわらず、あるいはそれゆえにこそ、強権の担当者たちは、この警告を民衆に忘れしめようとし、民衆もまた束のまの安佚(あんいつ)をねがって、それを忘れていることを望んできたのではなかった

29) 大江(1966)前掲書、pp.173-174

だろうか?[30)]

大江は広島と長崎の原爆を経験しながら、当時の沖縄の核基地について無頓着であった日本政府と日本国民に対し問いかけている。戦後、原爆の悲惨さに対し関心を向けながらも、高度経済成長期の流れのなかで多くの日本人における戦争や原爆への記憶と関心は薄れていった。このような日本人の態度と負の記憶を忘れようとする谷間の人々の態度は同類のものだといえるだろう。1960年代、さらなる戦後からの脱出のため経済的な豊かさを目指していた日本人のなかに、当時の核基地が置かれた沖縄の現状に自分のこととして危機感を抱いた人は多くなかったであろう。そして何よりも米軍の沖縄への核の持ち込みを黙認した日本政府の態度は、沖縄の人々への再びの背信であったといえるだろう。

「核時代の森の隠遁者」が発表された1968年の1月には、ベトナム戦争での主力空母となる米国海軍の原子力空母・エンタープライズ入港に対する反対運動、佐世保エンタープライズ寄港阻止闘争[31)]が起った。米国政府の要求を受入れるかたちでエンタープライズの入港を承認した当時の佐藤栄作内閣は、1964年11月の内閣発足以来、米国の核の日本への持ち込みを許容し、その核戦略に加担する姿勢を見せていたが[32)]、1967年12月11日には「非核三原則」を表明する。このような国民を欺くような当時の日本政府の態度に対し、大江が憤りを感じていたことは推測できるであろう。何かを訴えようとするギーと、その言葉に耳を傾けようとせず彼を邪険に扱う森の人々の態度は、声をあげる沖縄の人々とその声、あ

---

30) 大江健三郎(1991)「核基地に生きる日本人―沖縄の核基地と被爆者たち」『持続する志』講談社文芸文庫、p.197(初出:『世界』1968.1)

31) 佐世保エンタープライズ寄港阻止闘争：1968年1月の米国海軍の原子力空母・エンタープライズの佐世保入港への反対運動を機に反対派学生ら警官隊とが衝突した事件。1967年9月の米国政府の要請を受け、当時の佐藤栄作内閣は同年11月に米国海軍の原子力空母・エンタープライズの米軍佐世保基地寄港を承認した。エンタープライズの佐世保入港の目的は乗組員の休養や物資の補給であったが、ベトナム戦争において主力空母となる同艦の入港に対し、日本のベトナム戦争加担、核の持ち込みを懸念する野党議員や市民団体、学生、住民などが反対デモを繰り返し、一部の学生たちは警官隊と衝突した。

32) 新原昭治・浅見善吉(1982)『アメリカ核戦略と日本』新日本出版、pp.353-367参照。本書にて新原と浅見は1950年代半ば以降から1970年代はじめまでを日米安保条約にもとづいて米国の核持ち込み戦略へ加担する自民党政府とこれに対抗して日本の非核化を求める世論や運動との抗争、対立の時期であったとし、それを1950年代半ばから60年頃と1960年代末から70年代はじめの二つの時期に分けて分析している。1955年3月14日の会見で鳩山一郎が米国政府から日本に原爆を貯蔵してほしいという要求があれば認めるかとの質問に対し「私は“力による平和”という状態は長続きしないものだと思っているが、もし現在の“力による平和”を正当として是認するなら認めなければならないだろう」と発言したことを米国の日本への核兵器持ち込みを容認する態度だとし、佐藤栄作については1964年11月9日に内閣発足後早々にかねてからの懸案であった米原子力潜水艦の寄港に日本政府として初の許可をくだしたとしている。

るいは当時の核兵器反対を唱える人々の声を圧殺してきた日本政府の態度だといえるのである。

核について谷間の人々に訴え続けたギーは、春の御霊祭でさらに声をあげ「核時代の摩の代弁人として攻撃をしかけてくる」[33]ように「詩のごときもの」を叫び続けた。

> 核時代を生き延びようとする者は
> 森の力に同一化すべく　ありとある市
> ありとある村を逃れて　森に隠遁せよ!　[34]

いつものように人々から相手にされなかったギーは憤激し、それが事故か故意かは不明だが、焚き火の中に落ちてしまうのである。ギーは自分を救助しようとする青年たちを拒むように彼らの鼻先を持っていた竹槍で突きまくり、やがて焼け死んでしまう。

> 隠遁者ギーは真黒のゴム人形のような具合いに焼けただれており、それは広島で原爆にやられて死んだ村出身の若者の御霊の扮装にまことによく似ていた。谷間の人間みなが、はじめて隠遁者ギーの説教と深く関わる、もっとも根本的な動揺をあたえられたのはこの隠遁者ギーの死体の眺めによる最後の一撃によってだったとぼくは思う。[35]

「詩のごときもの」とギーの死体の様子からは、核についての警告が明白に読み取れる。ギーの言葉に耳を貸さなかった谷間の人々は、ギーの死を目にすることではじめてギーの言葉を理解し核の恐ろしさを悟ったのである。ギーはその言葉と自らの死によって読者の想像力をかき立て、核問題についてあらためて想起させる存在だといえるだろう。しかし、ギーと森の人々との関係にも注目すると、そこには過去から1960年代後半当時に至るまでの沖縄の人々と本土の日本人の関係が浮かび上がるのであり、作者の着目点が当時の核問題だけでなく沖縄の過去にも向けられていたことがわかるであろう。大江は1960年代の沖縄の現状を通し、過去からの沖縄と日本のあり方も見つめていた。大江は、沖縄戦にて地元の民衆に「自殺」を強いた本土の日本人が22年間に渡って「自殺」のせとぎわに彼らを放置していると、沖縄の米軍統治と核基地をそのままにしてきた日本社会を批判している。[36]ギーは村の人々に核の危険性を訴えながらも、それを聞き入られることなく「自殺」

---

33) 大江(1966)前掲書、p.179
34) 大江(1966)前掲書、p.179
35) 大江(1966)前掲書、p.184
36) 大江(1991)前掲書、p.200参考。大江は本論にて、1960年代当時の核基地の置かれた沖縄の状況に関

するかのように不可解な形で死亡した。このことは核について切実に訴えてきた者、あるいは竹槍という貧弱な武器をもった民衆が犠牲となって死んだことを示唆しており、言いかえれば沖縄の人々の声を圧殺してきた結果として読み取れるのである。

5. おわりに

ここまで本稿では「ぼく」の語る「贖罪羊」と「自由」を中心に考察を行なってきた。テクストが発表された1968年を中心とした時代背景と照らし合わせることで「核時代の森の隠遁者」が核問題について言及されているだけでなく、沖縄に向けられた作者の視線が描かれている作品であることを明らかにした。

「ぼく」と森の谷間の人々の関係に焦点を当てることで、それらが沖縄と本土の日本人の関係を映し出していることを指摘した。「贖罪羊」の役割を自己犠牲的に引き受ける「ぼく」は明治から戦中戦後とさまざま犠牲を強いられてきた沖縄の人々の姿であり、森の谷間の人々はそのような犠牲を強いてきた本土の日本や日本政府の表象であった。明治政府の行なった琉球処分により強制的に日本の一部となった沖縄は多くの弾圧を受け、太平洋戦争では日本で唯一の地上戦が繰り広げられ多くの犠牲者を出し、戦後は日本政府に見放されるかたちで米軍基地の負担を押し付けられることになった。作者は明治以来、本土の日本、つまり日本国家の犠牲として多くの歴史を歩んできた沖縄の姿を「贖罪羊」を引き受ける「ぼく」の姿に映し出したのである。

また、1968年11月に初めて行なわれた琉球政府行政主席の公選で、日本との一体化政策を拒む形での本土復帰を選択し、本土復帰のなかでのアイデンティティー回復を目指そうとした沖縄の人々姿は「ぼく」の「自由」として表現されていた。「贖罪羊」として森の人々か

する国際政治学者ハンス・モーゲンの日本の核武装が自殺行為にほかならないと発言したことに対し、以下のように語っている。「現に核基地をもつ沖縄は、それが核武装した中国をなおも封じこめるべきアメリカの極東戦略の最前線の基地としてそこにある以上、まさにハンス・モーゲン教授のいわゆる自殺行為をおこなうべく島ぐるみで待機している状態にほかならない。なぜ、そのようなおぞましくも愚かしい危険が、あえておかされているのかと問うとすれば、そこにはグロテスクなほどあからさまな力の論理による答がかえってくるほかはない。沖縄で「自殺」するのは沖縄の日本人であり、そこに基地をおくアメリカ人たちでないという答が。しかしここで道徳的な非難をこうむるべきは単にアメリカ人にとどまらない。沖縄戦においてすでに大量の沖縄の民衆を、文字どおりさせ、国をあげてそれを償うかわりに、二十二年間にわたってなおも沖縄の民衆を、もっと徹底的な「自殺」のせとぎわに放置しているのが、われわれ本土の日本人である」

ら孤立することで認識される「ぼく」の「自由」とは、戦中戦後と日本国家の犠牲となり当時米国統治下に置かれながらも自身のアイデンティティーを回復しようとした沖縄の人々の「自由」であった。大江は「贖罪羊」と「自由」という言葉を用い、明治以来、多くの犠牲を強いられてきた沖縄の姿をあらわすと同時に、そのような苦難の状況の中においてもアイデンティティーを回復する「自由」を意識し続けた人々の強さを描き出したのであろう。しかしながら、1968年当時、沖縄に存在した米軍の核を含む基地問題は進行形の状態であり、沖縄は依然として日本の犠牲を強いられる状況にあった。当時の核基地問題だけでなく沖縄戦なども含め、過去から当時まで本土の日本人は沖縄に対し犠牲を押しつけた事実から目を背け、沖縄の人々の声を正面から聞き入れてこなかった。森の人々に常に何かを伝えようとし、最期は核について訴えながら死亡した隠遁者ギーの表象は、日本国家によって圧殺された、過去の事実を伝え核の危険性を訴える沖縄の人々の声として受け止められるのである。

「核時代の隠遁者」が発表された1968年は明治百年の年であり、日本政府により明治を礼讃する社会的気運が醸成された。明治の負の歴史に目を伏せたままの当時の日本政府と日本社会に反して大江は、1968年の沖縄を通し、過去百年間の国家権力のもとに犠牲となった沖縄の姿を見つめていたのである。また、1968年はベトナム戦争が激化した時期でもあり、ベトナム戦争の軍事拠点となっていた日本各地の米軍基地のなかでも、最重要拠点であり核基地が置かれていた沖縄に大江の視線が向けられていたことも明白であろう。キューバ危機を経、中国の核武装化が明らかになり、米国のベトナム戦争での核兵器使用の可能性が囁やかれた1960年代は、まさに「核時代」であった。そのような「核時代」における1968年当時、核による死の脅威を最も身近に押しつけれていたのも、核基地のある沖縄の人々であった。大江は単なる核の脅威を語るのではなく、その脅威にさらされている沖縄の人々の表象である森の隠遁者ギーを描くことで、米国の核戦略とそれに追従する日本政府の犠牲となり得るのは、その当事者ではなく無辜なる沖縄の人々であることを喚起したのである。大江は日本返還を前にした1968年の沖縄の姿を通し、日本政府によって強いられてきた沖縄の犠牲的な歴史と沖縄の抱える米軍基地と核問題を見つめると同時に、国家権力によって犠牲を強いられる人々の姿を「贖罪羊」と「自由」という言葉を用いて顕在化しようとしたのであろう。

【参考文献】

新崎盛暉(2016)『日本にとって沖縄とは何か』岩波新書、pp.18-20、pp.46-48
大江健三郎(1966)「核時代の森の隠遁者」『大江健三郎全作品　第Ⅱ期　3』新潮社、pp.159-161、pp.167-171、pp.173-176、p.179、pp.184-186
_____(1991)「核基地に生きる日本人－沖縄の核基地と被爆者たち」『持続する志』講談社文芸文庫、p.197、p.200(初出:『世界』1968.1)
_____(1992)「核基地の直接民主主義」『鯨の死滅する日』講談社文芸文庫、pp.121-122、pp.131-132、p.134(初出:『世界』1961.1)
楠田剛士(2004)「大江健三郎「核時代の森の隠遁者」論」『原爆文学研究』原爆文学研究会編、pp.78-82
黒古一夫(1989)『大江健三郎論－森の思想と生き方の原理－』彩流社、pp.36-38
櫻澤誠(2015)『沖縄現代史 米国統治 本土復帰から「オール沖縄」まで』中公新書、pp.79-109
篠原茂(1974)『大江健三郎論』東邦出版社、p.268
仲宗根勇(2014)『沖縄差別と闘う 悠久の自立を求めて』未來社、p.12、pp.43-46
新原昭治･浅見善吉(1982)『アメリカ核戦略と日本』新日本出版、pp.353-367
渡辺広士(1975)「解説－両義的な小説」『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』新潮文庫、p.465

논문투고일 : 2018년 06월 30일
심사개시일 : 2018년 07월 17일
1차 수정일 : 2018년 08월 04일
2차 수정일 : 2018년 08월 12일
게재확정일 : 2018년 08월 16일

〈要旨〉

大江健三郎『核時代の森の隠遁者』論

－『贖罪羊』と『自由』を通してみる沖縄の姿を中心に－

松崎美恵子

本稿では、大江健三郎の「核時代の森の隠遁者」(1968)をテクストが発表された1968年を中心とした時代背景と照らし合わせ分析を行った。「贖罪羊」と「自由」というキーワードに注目し考察を行なうことでこの作品が核問題について言及されているだけでなく、明治から現代にいたるまでの沖縄に向けられた作者の視線と本土の日本人への批判が描かれていることを明らかにした。大江は「贖罪羊」と「自由」という言葉を用い、明治以来、多くの犠牲を強いられてきた沖縄の姿をあらわすと同時に、そのような苦難の状況の中においてもアイデンティティーを回復する「自由」を意識し続けた人々の強さを描き出した。「核時代の森の隠遁者」では沖縄返還を前に、沖縄の強いられてきた犠牲的な歴史と沖縄の抱える米軍基地と核問題、つまり国家権力によって犠牲を強いられる人々の姿を顕在化しようとしたのである。

A study on Ōe Kenzaburō's "Eremite of the forest in the atomic age"

－The state of Okinawa through 'expiation sheep' and 'freedom'－

Matsuzaki, Mieko

This paper is analysis of Ōe Kenzaburō's "Eremite of the forest in the atomic age" published in 1968, focused historical background around 1968. It was proved that the text does not tell us about nuclear but also drew Ōe's eyes to stare at Okinawa from Meiji to the present age, and his criticism to Japanese of the mainland. By using the wards, 'expiation sheep' and 'freedom', Ōe expressed that Okinawa had been forced to much sacrifice since Meiji, and even in the thorny situation, Okinawa people had continued being conscious of "freedom" to restore identity. "Eremite of the forest in the atomic age" advocated the need to be thought about the sacrificial history of Okinawa, US bases and the nuclear issue in Okinawa by all Japanese, before the reversion of Okinawa to Japan.